S. Ashina

後期：Ｂ．近代日本とキリスト教思想
後期オリエンテーション
１．研究の視座と方法
　１－１：思想の解釈学的構造　　１－２：思想史と社会史
２．明治キリスト教思想の問題構造
　２－１：海老名弾正と自由主義神学　　２－２：海老名－植村のキリスト論論争
　２－３：植村正久と弁証神学１、２
　２－４：植村正久の日本論１　1/6
　　植村正久の日本論２　1/13
３．補足的考察
　３－１：比較思想研究から　1/20
　３－２：社会史と民衆史
　３－３：死者儀礼と宗教的多元性　1/27
Exkurs
　３．原発と科学技術の神学
　４．宗教言語論の諸問題　12/16

＜前回＞植村正久と弁証神学
（１）二つのフロント
１．弁証論とは、弁証を試みる相手あるいは論敵の思想的立場を想定しつつ、自らの思想内容の説明あるいは主張を試みるものであって、そのことから弁証論の内容は、こうした論争の場（フロント）によって、規定されることになる。したがって、弁証論の分析は、それを規定するフロントとの関係を念頭になされることが重要であり、植村のキリスト教弁証論の場合は、西欧近代（とくに 19 世紀）の思想状況と明治日本という二つのフロントが問題になる。そこで、以下においては、まず西欧近代の思想状況というフロントが植村の議論にどのように反映されているかについて、懐疑論・不可知論・唯物論への反論と進化論への対応を取り上げ､次に明治日本の状況との関連へと議論を進めることにしたい。
（２）懐疑論・不可知論への反論――人間は無限を知りうるか――
２.西欧の伝統的な有神論的自然神学の主要な論敵としての懐疑論・不可知論・唯物論と、植村の徹底的な反論。
（３）宗教と科学の関係論、そして進化論への対応
14. 植村は、断片的な科学的知識に言及することができたにとどまらず、「宗教と科学」の関係について、独自の見解を有していた。とくに、進化論に関する植村の見解は、現時点でも十分に注目に値する。
23. 植村のキリスト教弁証論の課題は進化論を初めとした近代科学とキリスト教信仰との関係をめぐる誤解を解くことに置かれている。これは、キリスト教信仰を近代日本において弁証するだけでなく、近代科学自体にとっても重要な意味を持つ。それぞれの「本色」「己れの区分」にしたがった宗教と科学の正しい関係は、科学の「その進歩今日よりも迅速」(182)にするものとなるからである。「論者望むらくは無神説及び唯物論と学術を混同せしむるなかれ」(182)。
（４）明治日本の状況
24.『真理一斑』は西欧近代の思想状況において、無神論・唯物論を論駁し、近代科学との関係を調停することを通して、キリスト教の弁証を目ざしたものであった。西欧近代のキリスト教が置かれた文脈において､西欧キリスト教の伝統に依拠しつつ展開されている。しかし､『真理一斑』は日本語で日本人に向けて書かれた書物であり、その背景には、明治キリスト教の置かれた近代日本の文脈が存在することを見逃すことはできない。(21)
25.『真理一斑』表れた明治以降の日本の宗教状況。
　『真理一斑』を読むとき、一見すると、植村は日本の宗教状況をあまり意識していない

かのような印象を受けるかもしれない。日本の状況については、ほんのわずかな言及が見られるのみである。
26. 西欧の啓蒙的近代をモデルとした明治日本の近代化。西欧近代における宗教批判が自明なものとして導入される。

↓

キリスト教的伝統はもちろん――「今やキリスト教のわが国に行なわれんとするにあたり、世の哲学、或いは浅薄なる見解を立て、キリスト教は学術とすこぶる反対せるもののごとく思惟し、知識いよいよ開くれば、宗教漸くにしてその跡を滅すと妄想するもの少なからずと聞けり」(169-170)――、日本的な宗教的伝統に対しても、無理解と蔑視がとくに知識人の間に蔓延することになった。植村がキリスト教の弁証を試みたのは、こうした状況下だったのである。
27. しかし、現時点から見るならば、日本の宗教的な伝統と明治の新たな民衆的な宗教運動を視野に入れることができなかったという点で､限界を有していたことは否定できない。この点は、明治以降の日本キリスト教自体の決定的な限界であったように思われる。
28. 以上のような限界を有するとしても、植村の近代日本に対する批判的洞察には、なおも学ぶべき点がある。
「今やわが邦人が宗教の弊に懲りてこれを度外に措くの傾向あるいは、いずくんぞその軽蔑する宗教の迷妄よりも更に大なる迷妄ならざるを知らんや。」(10)

４　おわりに

29. 植村のキリスト教弁証論の評価。日本・アジアにおけるキリスト教の弁証に対しては、西欧近代のキリスト教思想の単なる紹介であることを超えて、日本固有の歴史的そして宗教的状況と正面から向き合うこと、そのような仕方でのキリスト教思想の独自な仕方での具体化が要求される。このことから判断するとするならば、『真理一斑』における植村の議論は、日本の伝統との切り結ぶことにおいてなおも不十分なものであった。
西欧的近代合理主義（とその宗教批判）と日本的伝統という二つのフロントとの関係で言えば、植村ではこの二つがいわば一つに重ね合わされることによって――近代日本における西欧合理主義――、後者のフロントの固有性が十分に扱われないままに止まったと言わざるを得ない。[22]
30. 以上の点を考慮しつつも、植村の議論には、今後の日本におけるキリスト教思想の形成にとって、参照すべき点を指摘することができる。
キリスト論と進化論との関連で提出された、「宗教的問いに対する答えとしてのキリスト教」という議論。
31.『真理一斑』の議論は、人間は本来宗教的な存在であるとの主張から開始され、聖書のキリスト像へと進められた。これは、キリスト論的に、「問いと答え」の関係性において捉え直すことができる。
32. 宗教的問いは人間存在に固有のものである　→　救済あるいは救い主（メシア、キリスト）への期待と渇望が人類に普遍的に備わっている＝キリストの問いの普遍性。
→　偶像崇拝を含めて、歴史的な諸宗教はすべて、人間における救済の問いに基づくという点で、キリストの問いに関係づけられる。
33. キリスト教は、この人類が待望してきたキリストがナザレのイエスとして現れたことを信じる宗教であり、人類普遍の宗教的問いに対して、イエス・キリストという答えを指し示す宗教に他ならない。
植村は、キリスト教が信仰するイエス・キリストという答えが有する普遍的意義と卓越性を強く主張しており、まさにこの点においてキリスト教の弁証の最終的な主張が端的に表明されている。
また、宗教の神学において用いられる類型で言えば、『真理一斑』における植村の立場は、包括主義と評することができる。
35.「問いと答え」の関係論から見たときに、キリスト教と日本的伝統との関わりはどの

ように論じることが可能であろうか。

日本におけるキリスト教の弁証を、日本の宗教的伝統との関係で積極的に遂行しようとする場合、「問いと答え」の内容を具体的にどのように展開するかが問題になる。

↓

36. 祖先崇拝を核とする家の宗教という観点から、日本の宗教状況に内在する問いを解明すること。日本における伝統的な家・家族構造――これはほかの東アジア諸地域との共通のものであるが――は、近代化以降、とくに近年において、急激な変動を示している（家・家族の危機）。それと共に、この家を基盤とした日本の伝統的な宗教も大きな変化に直面し、ここに現代日本における宗教的問いが具体的に現れている。このような近代以降の歴史的文脈において、キリスト教の弁証を遂行しようとするならば、家・家族という視点から日本の宗教的問いを分析することは不可欠の作業であり、そこからはじめて、この問いへの答えとしてのキリスト教的な家・家族理解の提示＝生命の連続性に理解に基づく家・家族概念の変革と宗教的多元性の下での新しい日本的精神性の構築という文脈におけるキリスト教思想の具体化。

Exkurs 4

宗教言語の諸問題

１　はじめに

１．三つの問いから、キリスト教における「ことば」へアプローチする。

・生の営みとしての宗教（キリスト教）における言葉の位置づけ
・神と人間の関わりにおける言葉、神について語る可能性と具体性
・人間相互の関わりにおける言葉、宗教的現実を他者に伝達する問題

体系的な議論ではなく、ゆるやかに繋がった三つの問い

→　問いを開いたままにしておくこと
　　暫定的な答え

２　第一の問い

Ｑ１．キリスト教の宗教経験において、言葉はいかなる位置を占めるか。

２．宗教経験の場あるいはその表現としての象徴

・エルンスト･カッシーラーの象徴形式の哲学（岩波文庫）
　人間＝象徴を操る動物
・ティリッヒの宗教的象徴論
・波多野宗教哲学の象徴論

バーガー＝ルックマン　『日常世界の構成』新曜社。
バーガー　『聖なる天蓋――神聖世界の社会学』新曜社。
ルックマン　『見ない宗教――現代宗教社会学入門』ヨルダン社。
カッシーラー　『人間――この象徴を操るもの』岩波書店。
　　『シンボル形式の哲学（一）（二）（三）』岩波文庫。
盛山和夫『社会学とは何か　意味世界への探究』ミネルヴァ書房。

３．宗教的実在は象徴において成立する、宗教的経験世界は象徴の宇宙である。
　儀礼・サクラメント

４．いかなるタイプの象徴を基盤にするかで実定的な宗教は特徴付けられる（分類・比較ができる）。象徴（言語的契機＋非言語的契機、意味と力・欲望）、言葉・聴覚。

↓

Ａ１．言葉の宗教としてのキリスト教

一切は言語的である。言語行為が構成する象徴世界。
「1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。4 神は光を見て、良しとされた。」（創世記１章）

４．１．聖書の宗教における、言語・意味・聴覚の優位　→　cf. ギリシャ、仏教
４．２．この聖書的宗教の特徴付けを支持する事例として次のものが挙げられる。
・言語行為と創造行為（神の天地創造は言葉による創造である）
・「イスラエルよ、聞け」（申命記）
・「この律法を口から離すことなく」（ヨシュア記　1:8）
・「信仰は聞くことにより、キリストの言葉を聞くことによって始まる」（Rom.10:17）
・キリスト（神の言葉、先在のロゴスの受肉）―聖書―説教。キリスト教の核心には言語的象徴が存在する。言語なしには、キリスト教的実在は成り立たない。
４．３．神象徴と経験領域（宗教経験―表現形態）
神＜超越性／内在性、不可視性・偶像禁止／経験可能性＞　→ 神自体と神表象の区別
(1) 旧約聖書の神象徴：詩編　　日常経験の場
盾、やぐら（砦の塔）、避け所　→　軍事
腕、足　→　身体
父、主、牧者　→　社会関係、人格、生産
(2) キリスト（キリスト論的称号）
神の子、人の子、ダビデの子、救い主（メシア）、主、ロゴス
道、真理、いのち（ヨハネ的象徴）
魚（形態化）
(3) 聖霊：「わたしは＜霊＞が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た」（ヨハネ 1:32）
トーレイフ・ボーマン『ヘブライ人とギリシヤ人の思惟』新教出版社。
並木浩一「視覚表現における古代的特色――ホメロス・ウガリト文学・旧約聖書」
（『旧約聖書における社会と人間――古代イスラエルと東地中海世界』教文館）
水垣渉「ヘブライズム・ヘレニズム・キリスト教」
（武藤一雄・平石善司編『キリスト教を学ぶ人のために』世界思想社）

３　第二の問い

Ｑ２．神についていかに語るのか。
神の言語？
完全言語の探求（エーコ）

５．神が人間に対して語りかけるのは人間の言語によってあり、人間が自らの宗教的経験を語るのは人間の言語によってある。
・ケネス･バーグのロゴロジー
（宗教の言語と世俗の言語の類比・相互移行。
自然の領域／社会領域／超自然の領域。人間の言語の動態）
「父」から「父なる神」へ
↓
６．隠喩という方法、隠喩は新しい認知の表現の固有の手段となる。
・逆説的言語：否定を介した再肯定＝新たな語り（リクール『生きた隠喩』岩波書店）
・隠喩は第一的には装飾ではなく認知の問題である。
「時は金なり」→時は「なくなり」「割く」ことができる。
父なる神という認知

・生きた隠喩は反復され辞書に編入される。自明的な表現の一部となる。
・メタファー化は反復され継続される（規範的テキストがメタファー化による逸脱を規制する）　→　伝統と変革

７．伝統的な教義（キーワード）は、新たな歴史的状況において繰り返し隠喩化される。
父なる神　→　アッバとしての神　→　母なる神
エレミアス　　フェミニスト神学の挑戦
↓
Ａ２．宗教言語の中で隠喩は中心的位置を占める。
新たな経験の言語化と解釈を介した伝統の形成

４　第三の問い

Ｑ３．神について他者へいかに伝達するのか。

８．隠喩からテキストへ、あるいは隠喩の拡張としてのテキスト＝イエスの譬え。
聴衆における驚きを介したメッセージの生成（言葉の出来事）
自らの古い認知を振り動かし転換し、新しい認知を生起させる。

Ｊ・エレミアス『イエスの譬え』新教出版社。
ノーマン・ペリン『新約聖書解釈における象徴と隠喩』教文館。
W．ハルニッシュ『イエスのたとえ物語　隠喩的たとえ解釈の試み』
日本基督教団出版局。

９．モデル･ケース
＜「ぶどう園の労働者」の譬え＞：マタイによる福音書の２０章１～１６節（新共同訳）
（構造分析：1a ＋ 1b-15〈1b-7 ＋ 8-10 ＋ 11-15〉＋ 16）
20:1 「天の国は次のようにたとえられる。
ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。2 主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。3 また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、4 『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。5 それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。6 五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、7 彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。
8 夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。9 そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。10 最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。
11 それで、受け取ると、主人に不平を言った。12 『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。』13 主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。14 自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。15 自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』
16 このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

10.「最初の労働者」（不満）から「既存の生」を相対化すること。

神の人間への配慮とは何か（「同じように支払ってやりたいのだ」）
平等とは、人間としての生活の保障（人権）を前提とする。
神の国とは、「開かれた食卓」である。
↓
Ａ３．物語による宗教経験（認知）の伝達・共有。
物語を共有する集団としての宗教共同体

５　むすび

11. キリスト教は優れた意味で「言葉の宗教」であり、言語をめぐるさまざまな議論は古代以来キリスト教研究に対して新たなインパクトを与え続けてきている。
↓
キリスト教思想にとっての哲学の意味

＜参考文献＞

１．カッシーラー『シンボル形式の哲学』全三巻、岩波文庫。
２．ティリッヒ『ティリッヒ著作集・第四巻』白水社。
３．波多野精一『時と永遠　他八篇』『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫。
４．ウンベルト・エーコ『完全言語の探求』平凡社。
５．バーグ、Kenneth Burke, *The Retoric of Religion. Studies in Logology*, University of California Press, 1961.
６．リクール『生きた隠喩』岩波書店。
７．レイコフ、ターナー『詩と認知』紀伊國屋書店。
８．エレミアス『イエスの宣教』『新約聖書の中心的使信』新教出版社。
９．リューサー『性差別と神の語りかけ　フェミニスト神学の試み』新教出版社。
10. クロッサン『イエス　あるユダヤ人貧農の革命的生涯』新教出版社。
11. 芦名定道「宗教的認識と新しい存在」（京都哲学会『哲学研究』第 559 号、1993 年、33-72 頁）、「キリスト教信仰と宗教言語」（『哲学研究』第 568 号、1999 年、44-76 頁）。